やきもの見聞録(4)　備前焼（岡山県）

太閤が愛したやきもの

熊　　博　毅

父が亡くなって1年の彼岸を迎えたころ、両親の遺影の前に一輪の菊花を捧げた。そのとき、ふと思い立って生前、父が愛用していた備前焼の徳利を花生としてみた。

それから数日経って、普段以上に花もちの良いことがわが家で話題となった。定期的に水替えをしているが、茎が傷まないし、水も臭くならないと家人は言う。そのとき、「備前花入　花が長持ち」と言い伝えられていたことを思い出した。ほかに「備前水瓶　水が腐らぬ」「備前徳利　お酒がうまい」という同意のことばがあったことも。

それ以前から備前焼には魅力を感じていたが、この不思議発見が、間違いなく今まで以上に私を強く備前焼に惹きつけることになった。

備前焼の歴史

備前焼の歴史をさかのぼると、6世紀中ごろに技法が伝わったという邑久郡の須恵器にたどりつく。この時期の須恵器窯では、地域内での消費用とともに、朝廷や官衙へ貢納するための品々が生産された。

平安から鎌倉時代にかけても備前焼は作り続けられるが、鎌倉時代の備前焼製品は壺、擂鉢（すりばち）、甕に限定され、山陽道や片上湾、吉井川の水運を利用して西日本各地に移出された。その結果、大型陶器においては「東日本の常滑焼、西日本の備前焼」という評価が定着する。

備前三耳壺（室町時代）
関西大学博物館蔵

赤褐色でよく焼き締り、日常生活になくてはならない壺や擂鉢、甕は、伝世するもの以外に、室町時代全期間を通じ、近畿地方以西の西日本全域から考古学の遺物として出土する。こうしたことから、この時期、備前焼は大量生産、大量消費の時代を迎えていたことが分かる。

太閤が愛したやきもの

備前焼の歴史を振り返るとき、茶の湯と深い関係があったことも忘れてはならない。関係史料は室町後半期から散見され始めるが、大きく開花したのは桃山時代。水指や建水、茶碗など、この時期に作られた名品の数かずが今に伝わっている。

そして、かの天下びと、太閤秀吉も備前焼を愛した人間の一人である。天正15年（1587）に主催した北野大茶会では、内外の名器と並べて備前焼の建水や花入を上座に据えているし、自身の埋葬棺として備前焼の二石甕を使わせたというエピソードも残っている。備前焼に対する太閤の愛着は並々ならぬものがあった。

その一方で、備前焼が大量生産されるのはもったいないと、一か所の窯だけを残して他のすべてを壊させたりもしている。愛するやきものは自分だけのものと考えるあたりが、天下びとの天下びとたる所以かもしれない。

備前焼の衰退と復興

中世後期から桃山時代に大量生産され、好評を博した備前焼であったが、江戸時代になると長期低落傾向を見せるようになる。そして半官窯的な存在として藩から援助と規制を受けつつ生産が続けられたが、明治の廃藩置県で窯元に対する藩からの援助が全くなくなると苦難の時代を迎える。明治から大正にかけては、土管や煉瓦の生産に活路を見出さざるを得なかったのが伊部の窯業であった。

しかし、第一次世界大戦後、日本の伝統文化が再評価され、桃山時代の瀬戸や美濃・伊賀・信楽・唐津・備前といった茶陶器が注目されるようになったとき、備前でもその伝統を復活させる動きが起きた。その魁となったのが金重陶陽であり、そのあとに続いた数多くの陶芸家た

ちの手により現代陶器として備前焼は新たな展開を見せている。

作品クローズアップ

備前焼では、これまでに金重陶陽、藤原　啓、山本陶秀、藤原　雄、伊勢崎淳の５人が国の重要無形文化財技術保持者（いわゆる人間国宝）となっている。このうち、今回は山本陶秀、藤原　雄、伊勢崎淳の作品をクローズアップしてみよう。

最初は山本陶秀の手による湯呑である。白い生地に濃厚で力強く、赤々と燃え立つ緋襷が際立っている。腰から胴にかけて微妙に膨らみながらも、ほぼ垂直に挽き上げられたラインは、上部で一旦内側に絞り込まれたあと、僅かに反って薄くシャープな口縁部を形づくる。「ろくろの名人」と言われて、他の追随を許さなかった山本陶秀の手わざが光る作品である。

次は藤原　雄が作った徳利。緋色に焼き締められた小ぶりの徳利の表面に降りかかったカセ胡麻を抜く形で描き出された丸い模様が、右下へと流れていく景色に、小気味よいリズムを感じることができる。藤原　啓、雄と親子で人間国宝となった名門の血筋が生み出した備前焼らしい逸品である。

３つめの作品は、高温の窯の中から出され、急激に冷却されることで、器の表面が黒く変色した引出黒の酒呑である。焼き締めるため、茶系統の色彩が主となる備前焼の世界に「黒」を取り入れたのが伊勢崎淳である。特に引出黒は、備前焼に新たな息吹を吹き込むことになった。

蒼黒く輝く器肌に茶色の激しい流れ胡麻。それらが集まって形づくる大きな玉だれ。液状化した胡麻が冷えて、つややかな鼈甲のようになった見込みの塊り。いたるところに魅力ある景色が看て取れる。伊勢崎淳の手による神秘の輝きを放つ酒呑と言えよう。

湯呑、徳利、酒呑と、いずれも小品であるが、それゆえに掌の上で匠の至芸を間近に堪能できるところが、こういう小物のうれしいところかもしれない。

岡山県備前陶芸美術館

備前焼のことを手軽に学ぶのなら、まずは岡山県備前陶芸美術館を訪れたい。JR 赤穂線伊部駅のそば、駅から歩いて１分と立地条件も抜群である。古備前から現代に至る名品や資料を

一堂に集めるこの美術館は、１階が企画展示室、２階が鎌倉時代から明治時代までの作品を集めた古備前名品展示室、３階は人間国宝館と岡山県重要無形文化財作家の作品展示室、４階は物故作家代表作品展示室となっている。また、一般には公開されていないが、備前焼研究の基礎を築いた桂又三郎が収集した備前焼に関する古文書や書籍、陶片などを収蔵した桂又三郎文庫も置かれている。

さて、話を冒頭の続きに戻そう。

結局、父母の遺影に捧げた黄色の菊花は、１カ月近くにわたって元気な姿を保ち続けた。備前焼が持つ意外な力をこの目で確かめ、昔からの言い伝えが真実であることを確認できたのは、亡き父が私に送って寄こした声なき便りだったのかもしれない。お蔭で私は、以前よりさらに備前焼の魅力を強く感じるようになった。父母に対する感謝と追慕の想いを込め、次はどのような花を飾ろうかと今、思案している。

学術情報事務局次長（博物館・出版担当、学芸員）